

インテグリティと大学教育

明治学院大学国際学部教授 慶應義塾大学名誉教授

岡部光明（おかべみつあき）

日本の高校卒業生の半数以上が大学に進学するようになった現在、大学教育のあり方は将来の日本の国力を左右する課題であり、近年議論が高まっています。その目標として「社会人基礎力」とか「学士力」といった言葉が頻繁に登場しており、それを構成する要素として「考える力」とか「コミュニケーション能力」といった様々な力量が列挙される場合が少なくありません（岡部二〇〇九、一八五ページ）。その数が多ければ多いほど望ましいといった趣すらうかがえますが、私はそうした発想にやや違和感を感じています。

大学教育の三つの目標

確かに、目標を数多く列挙すればするほど議論は安全なものになります。しかし、教育の本質を考えるうえでは、何が核心に位置する要素なのかを見きわめることこそ重要です。私は、大学の学部教育の基本は「教養」を身につけることであると理解しています。ここでいう教養とは、単に知識の豊富さ、あるいは目先の問題に対してすぐに役立つ技量をいうのではなく「一般性の高い人間としての幅広い力量」であると私は考えたい。つまり、教わった知識を全部忘れてしまったときにその人に残るもの、それが教養であり、大学教育の目標はまさにこの点にあるべきだという考え方です。

そうした目標は三つの要素からなる、というのが私の論点整理です（図を参照）。すなわち日本語力、インテグリティ、向上心、この三つです。日本語力とは、理解力と伝達力を統合した能力に他なりません。インテグリティは、正直さ、誠実さであり、社会生活を円滑に営む力という側面を持っています。そして向上心とは、自分を常に高めようとする能力です。これら三つのうち、日本語力と向上心は比較的分かり易いものですが、インテグリティという表現は日本では未だ一般化していません。しかし、これは教育が目指すべき三本柱の一つであり、国際性を持つ目標でもあることを強調したい。これらの詳細は拙著『大学生へのメッセージ』（慶應義塾大学出版会、日本

図書館協会選定図書)で論じたところですが、以下では、インテグリティに絞ってその意義や必要性の理由などを述べることにします。

なお、大学教育の目標を上記三要素として理解するのが適切であるという意見は著者独自のものであり、著者が知る限り他に全く見当たりませんが、ごく最近、ある教育学研究者が教養を論理系能力、伝達系能力、意欲系能力の三つの基礎能力として指摘していること(金子 二〇〇七)を知りました。後者の分類を援用するならば「日本語力」は論理系能力と伝達系能力を合成したものということができ、また「向上心」は意欲系能力にほかなりません。そして「インテグリティ」はいわば社会系能力ということができます。したがって、筆者が指摘した三要素は、この研究者による分類を包括する(それをさらに拡充する)ものであるうえ、より具体的な力量として表現している点で一層理解しやすいのではないかと考えています。

インテグリティの意義と実例

インテグリティとは「言うことと行うことが一致していること」です。つまり言行一致であり、両者が一体化しているという意味で完全性を意味しています。われわれは、口では良いことを言っても実際の行動がそうになっていない場合が少なくありませんが、そうではなく両者が一致していること、それがインテグリティです。そして重要なのは、他人が見ていようが見ていまいがその姿勢が貫かれていることです。人が見ている場面では言行が一致していても、人が見ていないところではそうでないケースがありがちですが、そうではなく人の目が届かないところでも言うことと行うことが一致していること、これがインテグリティの重要な側面です。

これは、社会を構成員する個人にとって最も重要な倫理的基準のひとつであり、それが行き渡っているのが良い社会だと思います。私はその重要性にほんとうに気づいたのは約二〇年前、米国の名門プリンストン大学で一年間教壇に立った時でした。そこでインテグリティという意味の深さを初めて知るとともに、同大学ではその重要性を教育の根幹として据えていることを知り、強い衝撃を受けたのです。

プリンストン大学では、期末試験において何と試験監督を置かずに試験を実施しているのです。期末テストの際、教員は試験問題と解答用紙を試験教室で配布し、自分の研究室に帰ります。そして試験時間(二時間程度)の終了を見はからって、再び教室に現れて答案を回収し、それを持ち帰るのです。つまり、試験監督が誰もいない状態で期末試験がなされるわけです。こうした試験を公明正大に行うため、学生は「不

正行為をしていないことを私の名誉にかけて誓います」という誓約文を答案に自筆で書いて署名することになっています。このためこのシステムは「名誉ある宣誓制度」と称されています。

ここでは、不正は人格を損なうという考え方が強調されており、現に教育において学生がそれを身につけるように制度的対応がなされているわけです。すばらしい、そして勇氣あるシステムであり、率直に言って羨ましいと思います。

なぜインテグリティが大切なのか

なぜこのようにインテグリティを重視するのでしょうか。第一に、インテグリティを基礎とした行動をしていれば、何も言い訳をする必要がないからです。つまり、他人の目を不必要に気にかけることがなくなるので自主性が高まり、その結果、より良い判断ができるようになるからです。第二に、インテグリティは責任を持って行動することを意味しているので、第三者からの信頼感が高まり、自分にとって喜びになるからです。第三に、インテグリティを生活の基準におけば、込み入った日々の生活を単純化できるというメリットがあり、毎日の生活に自信をもたらしてくれるからです。

さらに、インテグリティは国際性、普遍性のある価値であることも付け加えておきたいと思います。例えば、国際機関の代表的存在である国際連合では三つの基本的価値を掲げていますが、その一つとしてそれがうたわれているのです。すなわち国連における三つの価値とは、専門的能力、インテグリティ、多様性の尊重であり、国連の幹部職員を全世界から公募する場合、この三つを充足する人であることを強調しているのが印象的です。

インテグリティの重要性は、組織についても同様に当てはまります。企業の経営が誠実性をもってなされていない場合には、多くの事例が示すとおり企業の命取りになる場合もでてくるわけです。私は学生に課題レポートを課す場合、無断引用など不正がない旨を表紙下方に書かせて署名させています。また私の授業中に即答できないような質問が学生からでた場合、分からない旨を率直に述べるとともに自分が納得するまで調べたうえで回答するようにしています。これらはほんの小さい実践にすぎませんが、インテグリティがいかに重要かを学生に確信してもらえよう努力している次第です。

(株式会社 自然総研 機関誌「トイロビジネス」一四三号、二〇一〇年五月)

[引用文献]

金子元久（二〇〇七）『大学の教育力- 何を教え、学ぶか』ちくま新書 679、筑摩書房。

岡部光明（二〇〇九）『大学生へのメッセージ--遠く望んで道を拓こう--』（日本図書館協会選定図書）慶應義塾大学出版会。